

公開講座を通して考える
「松江地域における国際交流の現状と未来」

山本 達之*・松田 みゆき**

(*島根大学生物資源科学部, **東京外国語大学留学生日本語教育センター)

The international cultural exchanges in Matsue region, now and future

—A consideration pertaining to the open lecture at 2005—

Tatsuyuki YAMAMOTO and Miyuki MATSUDA

島根大学生涯学習教育研究センター

平成18年3月

公開講座を通して考える 「松江地域における国際交流の現状と未来」

山本 達之*・松田 みゆき**

(*島根大学生物資源科学部, **東京外国語大学留学生日本語教育センター)

The international cultural exchanges in Matsue region, now and future

—A consideration pertaining to the open lecture at 2005—

Tatsuyuki YAMAMOTO and Miyuki MATSUDA

Abstract

The population of foreigners living in Matsue region is increasing these days. An open lecture, entitled the international cultural exchanges in Matsue region, now and future was planned to introduce the present situation and problems arisen from increased foreigners to citizens in Matsue region. This report gives the content of the open lecture held in 2005.

はじめに

この10年で、島根県内に居住する外国人は2倍以上に増加し、松江地域でも外国人が急増している。それに伴い、「国際文化観光都市」である松江市では行政と市民による地域を挙げた様々な取り組みが実施されている。本学においても留学生の受け入れをはじめとする国際交流プログラムの積極的な推進が行われており、その結果生じる人的な交流は地域における国際交流の草の根の活動と密接に関係している。このような状況を受けて、著者らは、「松江地域における国際交流の現状と未来」の題目で公開講座を計画・実施した。

本公開講座では、地域における国際交流の取り組みの現状を知り、その活動の意義を再認識することを通して地域における国際交流の未来を、交流の担い手である地域の方々と共に展望することを目的とした。意見交換等も積極的に行い、受講者の方々にとって具体的な国際交流活動への取り組みへと繋がるような気づきと学びの場を提供するよう計った。本稿は、その報告書である。

I 公開講座実施の背景

島根県内に居住する外国人の数は、近年増加の一途を辿っている。平成6年には2,689人であった外国人人口は、平成9年前後から急激に増え、平成16年12月末では、5,810人に達し、その後も増加し続けている。本学、松江キャンパスが位置する松江市には、1,191人の外国人が居住しているが、これに、出雲キャンパスの位置する出雲市や、統合後の新松江市に新たに加わった町村や近隣の市町村を合計すると、島根県全体の5割以上の外国人が松江市近隣に居住している計算になる。国籍別に見ると、中国、フィリピン、韓国・朝鮮、ブラジルの順であるが、外国人の国籍は実に多様で、56カ国（無国籍の者2名を含む）に及んでいる。このように、外国

人の数や多様性から見た時に、松江地域における国際化が急速に進んでいることは明らかである¹⁾。

外国人が増加しているという現状を、行政サイドは認識しており、すでに大規模な在住外国人対象の実態調査²⁾が実施され、様々な交流イベントや外国人に対する日本語講座などの企画運営が行なわれるなど積極的な取り組みがみられる。こうした活動は、県レベルとしては、(財)しまね国際センターが、市レベルとしては、松江市国際交流課・(財)松江市国際交流協会が各々中心となって行っている。その他にも、様々な民間団体が各々積極的な活動を展開しつつある。島根県発行の『島根県の国際化の現状(平成17年度版)』の「島根県の国際交流のあゆみ」によると、「島根県で『国際交流』が行政課題として認識されるようになってきたのは、総務部総務課に学事国際交流係が設けられた昭和62年(1987年)頃、交流活動が活発化したのは韓国慶尚北道と姉妹提携を行なった平成元年(1989年)からであると考えられる³⁾とあるが、本学でも慶尚北道との関わりは深く、毎年の夏休みには、慶尚大学と本学の学生が互いに行き来するという交流プログラムが、本学の生物資源科学部を中心に現在も継続している。このプログラムでは、韓国学生生のホームステイも実施しており、多くの本学関係者の間でも身近なプログラムとして親しまれている。また、松江市国際交流協会でも夏季に韓国の大学生を招いた短期滞在プログラムを継続的に行なっており、このような国際交流は草の根レベルで松江地域に根付きつつあると言えよう。しかしながら、松江地域で行なわれている様々なレベルの国際交流活動を俯瞰的に眺め、分かりやすく紹介する活動が十分であるとは言えない現状がある。

一方、これら外国人のうち、本学に関わりの深い留学生に目を転じてみよう。図1は、島根県全体の留学生の数、及び、島根県内の受け入れ機関別に分類した棒グラフに、全国の留学生総数の年次変化を、重ねたものである。さらに、図1には、島根大学留学生総数⁴⁾の年次変化もあわせて示されている。これによると、全国の留学生数は、平成4年から10年頃まで、ほぼ横ばいの状態が続き、平成11年以降爆発的に増加し、平成15年には10万人を突破したことが分かる⁵⁾。また、参考までに平成17年5月1日現在の留学生数を述べると、前年比3.8%増の12万1,812人と引き続き増加傾向を示していることが分かる⁶⁾。

一方、島根県全体として見ると、平成9年辺りから、ほぼ横ばい状態が続き、平成14年頃からやや増加に転じている。ただ、平成14年以降の留学生増加分は、そのほとんどが平成12年に開学した島根県立大学の留学生が年次進行に伴って増加したためであり、島根大学の留学生数は平成11年の183名をピークとして減少し続けていることに注意を向けるべきであろう。我が国全体の留学生総数の推移を考慮すると、本学の留学生数が減少していることは極めて特殊な事態であると言わざるを得ない。松田は、すでに平成16年3月に、公開講演会でこの点について指摘した⁷⁾。しかし、その後も留学生数の減少傾向は続いており、本学の留学生総数は平成16年12月の段階で156名、平成17年5月の段階では145名まで減少している。もちろん、本学でも留学生に対する取り組みが軽視されていた訳ではない⁸⁾。しかし、本学に留学する学生が減少しているのは、その背景の一つに、留学生を受け入れるために必要と考えられる体系的な日本語講義の絶対数の不足があったのではないかと考えられる。図2は、平成15年度の時点における本学、鳥取大学、山口大学の日本語講義コマ数を比較した結果を表している。大学全体の規模を学生数の点から比較すると、山口大学が一回り大きく、本学と鳥取大学はほぼ同規模であり、

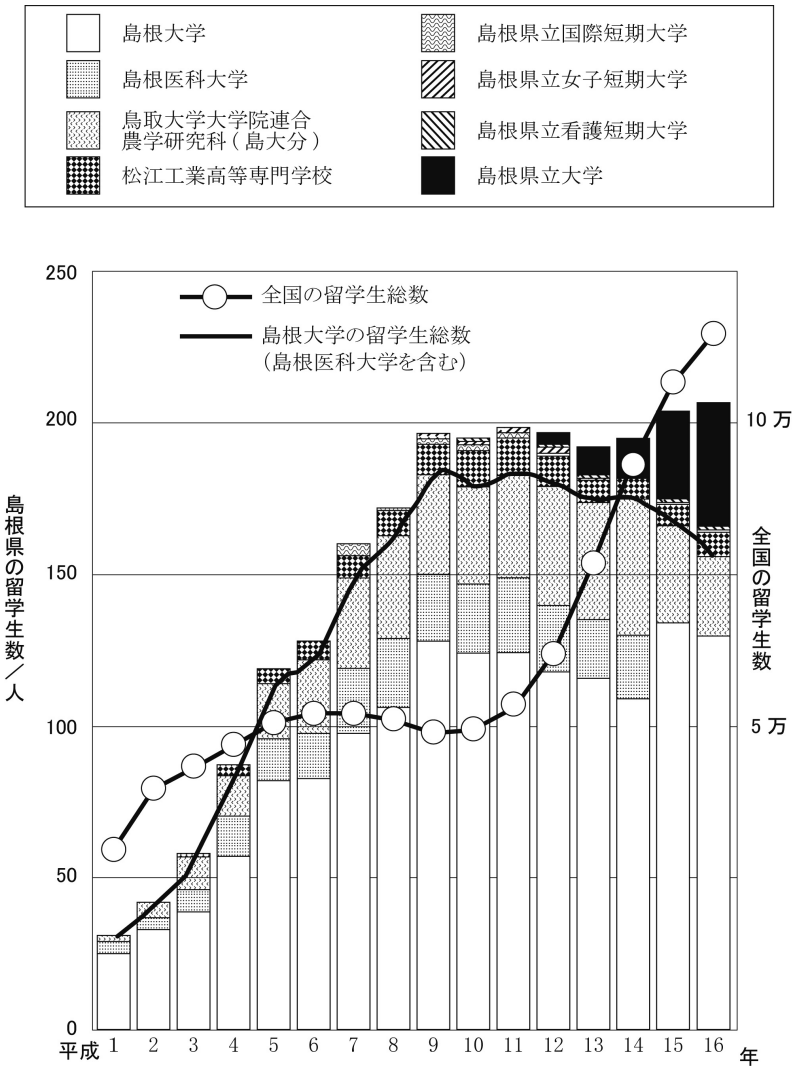


図1. 島根県内の留学生と全国の留学生総数の概要
 島根県総務部国際課『島根県の国際化の現状』2002年、島根県環境生活部国際課『島根県の国際化の現状』2005年、文部科学省高等教育局留学生支援課『我が国の留学生制度の概要』2004年より改変して作成

概ね、3大学とも典型的な地方大学である。正規の日本語講義の数ではそれほど差が無いが、他の講義数においては留学生に対する取り組みには大きな差が見受けられた。鳥取、山口の両大学は、この数年留学生数が増加しており、省令の留学生センターが相次いで設置され、予備教育や日本語補講を手厚く行い、留学生に対する配慮がされている。幸い、本学でも、昨年度から正規授業及び日本語補講数が増加し、本年度より留学生課のホームページが刷新されるなど、留学生に対する支援が充実しつつある。しかしながら、大学院特別コースの留学生に対する取り組みの現状は、未だに必ずしも充分とは言えないのではないだろうか。彼らは主な教育研究活動を英語で行なうことを前提としているため、入学時における日本語能力については問

大学 (学生総数/人)	島根大学 (6,532)	鳥取大学 (6,247)	山口大学 (10,950)
留学生総数/人 (平成17年5月現在)	145	165	291
省令留学生センター 設置年度	—	平成15年度*	平成14年度*
日本語講義の コマ数/週	補講：3 正規：6 予備教育：—	補講：17 正規：7 予備教育：16	補講：15 正規：11 予備教育：29
省令留学生センター 常勤教官数/人	—	5	6

※平成16年度より「国際交流センター」(鳥取大学)、「国際センター」(山口大学)

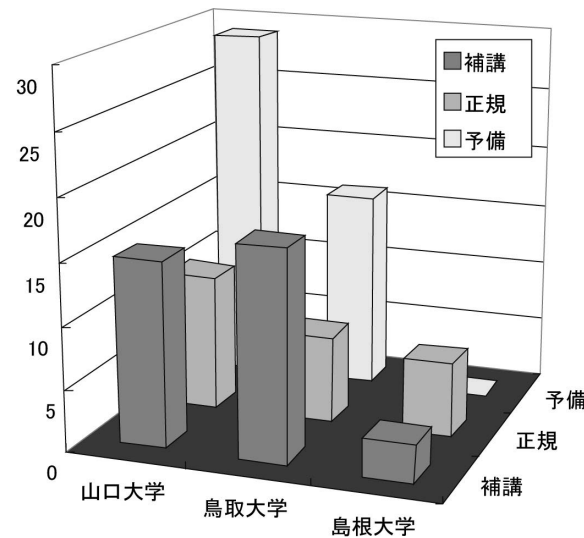


図2. 留学生数と日本語講義のコマ数の比較 (平成15年度)

われない。しかしながら、日本語は生活言語として日常生活に不可欠である。そのため、その日本語学習支援は留学生の受け入れ大学の責任において留学生サポートの一環として実施することとされている。このサポートの厚薄は大学によって異なり、サポートが不十分な場合は、特別コースの留学生たちは、本人の自助努力や、受け入れ教員の個人的な支援、周囲の日本語ボランティアグループの運営する日本語教室の支援等に頼ることになる。これらの現状と問題点の指摘は、本学において10年以上以前から行われている⁹⁾が、対応及び成果へと結びついているとは言い難い。そのような留学生たちの置かれた現状を浮き彫りにするのが図3である。松田が、平成13年度に行なった調査報告¹⁰⁾によると、松江地域に存在する三つの日本語ボランティアグループの教室に来る受講者244名のうち、実に70%に及ぶ約170名が、島根大学の留学生とその関係者であった。このようにして支援体制の手薄な部分の補完が地域住民の方々の支援で行われているのである。日本語ボランティアグループが運営する日本語教室で日本語ボランティアとして活動している方々からは、受講者の大部分が島根大学の留学生であるので、大学の建

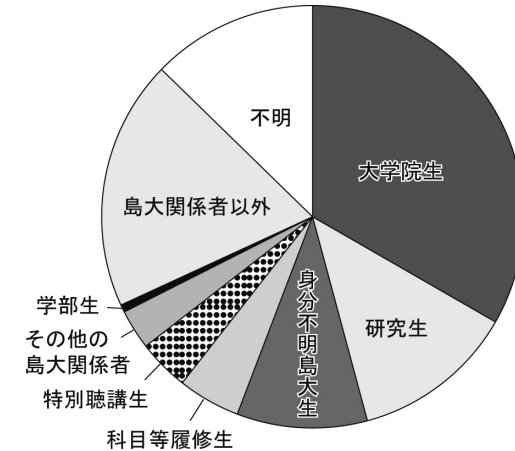


図3. 松江地域のボランティア日本語教室の受講者内訳 (平成13年度)

受講者総数244名

松田みゆき「島根大学留学生の日本語教育の現状と課題－日本語ボランティアグループと島根大学の連携の必要性について－」、『島根大学生涯学習教育研究センター紀要』, 第1号, 2002年, p.18の図4を改変して使用

物を利用してボランティア日本語教室を開講できないかという具体的かつ貴重なご提案もあった。また、留学生に関する公開講演会¹¹⁾の出席者から特に際立って多く聞かれた声は、本学での国際交流に関する公開講座の開講を、生涯学習者の視点から希望する要望であった。

そこで著者らは、本学の留学生を含む地域在住外国人を彼らの身近で直接支援して下さっている方々に少しでも貢献できる形で、本公開講座を企画することとした。著者らは、本公開講座では、まず、松江地域における国際交流の現状を俯瞰的に捉えること、そして地域在住外国人の存在を肯定的に捉えていただいた上で、各自が国際交流に更に興味を抱き参加する機会を増やすきっかけとしていただくことが必要であると考えた。講師陣には、できるだけ広範囲の専門家を揃え、多方面から広く活発な議論が行なわれるように配慮することにした。また、公開講座の性質上、地域の知的センターとしての大学の使命を意識して、生涯学習教育センター主催の平成17年度の公開講座として以下の内容を企画した。

II 公開講座の内容

上記のように、本公開講座は、国際交流をできるだけ多角的に捉え分析するために、日本語教育、心理学、民俗学、外国語、物理化学などの多方面の専門家を講師として実施することとした。また、本講座開催の意図に賛同くださり、実際に行政サイドで国際交流を企画・実施している松江市国際交流課に共催を依頼した。公開講座の実施責任者は、山本が担当し、仕事帰りの市民の方々が参加しやすいように、平日の夕方遅い時間帯に設定することとして、平成17年8月23日から9月13日の毎火、金曜日の午後6時から8時に、生物資源科学部3号館203号室において、市民の方を対象に7回に分けて実施した。第5回には、本学留学生の体験談を聴く機会を設定した。これは参加した受講者から、留学生の声を直接聞きたいとの希望が多かったため、それに応えるために開講後設定したものである。

1回目 8/23 (火)

講師：松田みゆき（東京外国語大学留学生日本語教育センター非常勤講師）

本公開講座全体のガイダンスを行なった。

松江市国際交流協会等で地域の日本語学習支援の指導を行っている講師が、地域在住の外国人を言語面から支援し交流している市民活動を紹介すると共に、現場の立場から日本語学習等の支援方法について具体的に話した。

2回目 8/26 (金)

講師：北神慎司（島根大学法文学部助教授）

異なった文化を持つ他者との交流が個人に与える影響とその意味について、本学法文学部教員が心理学の立場から話した。特に、実験心理学の立場から、異文化交流に伴う諸問題を、受講者参加型の形で初心者にも分かりやすく扱った。

3回目 8/30 (火)

講師：藤岡大拙（島根女子短期大学名誉教授）

出雲地方の文化の特性について考え、そこに暮らす「出雲人」と「外国人」との交流方法の知恵について話した。古い文献を平易に解説し、その背景にある文化について具体的エピソードを交えながら講演した。

4回目 9/2 (金)

講師：内藤忠和（島根大学法文学部講師）

学内外で中国語の講義を行い、中国人留学生の受け入れや地域の中国人との交流を進めている本学法文学部教員が、日中友好の観点から地域の国際交流について話した。

5回目 9/6 (火)

講師：山本達之（島根大学生物資源科学部教授）

本学生物資源科学部で留学生指導の経験のある教員が、かつて在外で留学生を送り出す側から教育に携わった経験（文科省による国費留学生予備教育プログラム）から得た知見を交え、本学の留学生の現状について話した。また、本学大学院総合理工学研究科所属の留学生ザイヌル・アクラミン氏に、本学で学ぶ留学生の生の声を伝えてもらった。

6回目 9/9 (金)

講師：李順恵（イ・スネ）（松江市国際交流課国際交流員）

松江市国際交流課の国際交流員が松江市の国際交流活動を紹介し、その活動を通して得られた国際交流に関する知見を話した。

7回目 9/13 (火)

講師：兒玉渉治（松江市国際交流課長）

松江市国際交流課職員が、松江市における国際交流の現状を、パンフレットやビデオを紹介しながら解説した。市民が気軽に参加出来る国際交流活動の醍醐味などについて話し、本公開講座を総括し終了した。

Ⅲ 公開講座の成果

公開講座は、当初1回の参加費を500円（全体で3,500円）に設定したためか、参加希望者は多くなかった。そこで、開講直前に無料のアナウンスを行なったが、周知期間が十分に取れなかったせいもあって、事前登録参加者は8名であった。ただし、参加された方々は、いずれも熱心に講座を聴きに来られ、積極的に議論に参加された。

本公開講座を開講するにあたり、受講者の意見を集約する目的で事前アンケートを行なった。以下に、アンケートをその結果とともに紹介する。

平成17年度公開講座「松江地域における国際交流の現状と未来」

受講者アンケートとその結果

アンケート提出全7名

アルファベットは、各アンケート回答者を示す。

1：この講座を受講しようと思いいなくなったきっかけをお聞かせください。

- A 職場で研修を命じられたため
- B 当大学がどのように国際交流に取り組んでおられるか、そしてこれからどうゆう方向に進まれるか知りたくてこの講座を受けることにしました。
- C 歴史認識や領土問題で交流中断となったり、感情悪化している日韓・日中間のことを考えて申し込みました。
- E 異文化を取り入れる事の出来る、やわらかい頭をいかにしたら出来るのだろうかと思いい、大学の先生の専門の話聞きに来ました。
- F MICCで案内を頂いた。（※著者注：Matsue International Community Center）
- G 二人の娘の留学体験と国際結婚などを通して国際交流に関心を持った。

2：松江地域で外国人に接する機会がありますか。

はい 7 いいえ 0

「はい」とおこたえになった方へお聞きします。どのような機会ですか？

- A 職場
- B 日本語教室です
- C 島大留学生の友人
- C しまね国際センター研修館
- D 職場や友人
- E MICC

- F 日本語ボランティア
- G 主人の仕事で、中国人
- G 娘の通訳ボランティアなどで、アメリカ人

ご感想は？

- B 最近ではアジア地方にかたよっていると思いますが、色々な国の方々と交流の機会があるとよいと思う。
- C 友人とはたまたま生まれが外国という以外あまり意識はしない。
- C 研修館ではボランティア講師を目指している立場なので先生と生徒のような感じです。
- E とても楽しいです。異なった文化を持つ方と話が出来る事。料理を一緒に作るなど。
- F にほんの文化を見直すというより文化を一から勉強するという感じです。
- G 異文化を知って高められると良いと思う。

3：一般に国際交流と聞いてどんなイメージを思い浮かべますか。

- A 海外旅行
- A 外国の人との付き合い
- B 国際交流を通して理解を深めることだと思う
- C 意識して、外国の人たちと仲良くなろうという意図的なもの
- E 外国人と交流する。言葉がわからなくて外国に行った時不安を感じた。市民レベルでの交流。
- F むづかしい。中国、韓国は特に気をつかう。
- G 松江市では環日本海…ということから韓国、中国などとの交流が盛んな様に思える。ヨーロッパにも積極的に交流してほしい。

4：松江地域で、今後どのような国際交流が行なわれるとよいと思いますか。

- A 観光地を生かした交流
- A 市民交流としての国際交流
- B 国際交流がもっと広くできればと思う
- C 国際交流というものが死語になるように、そういったものが当たり前という意識として捉えられるようになること。出来れば共通のテーマで共通の認識で少しでも得られるような活動を通じたこと。
- D 在住外国人が、個々の尊厳を大切に、共存・共生できるような社会になるような交流。今後、交流ではなく一歩進んだ「協力」になっていくのではないのでしょうか。日本語教育は、一種の協力かも知れません。ですから、タイトルを「国際交流」だけでなく、「国際交流・協力」としたら良いかも・・・。
- F 公民館単位で身近な交流ができるものを考えたらよいと思います。

5：この講座へのご意見、ご希望をお聞かせください。

- B 当大学留学生のお話も聞きたい
- C プラス意識としての国際交流ということがこの講座全体のことだと思うが、マイナス意識を埋めることもやって欲しい。具体的には、日本人・外国人という相反するやり方は、日本特有の感じがする。外国人差別につながるもの、歴史認識やその他特に意識の差が大きいものを埋めるような講義内容も期待したい。同じ地域に住む人間として格差について考えてもらう機会も必要だと思う。(例えば在日韓国朝鮮人)
- D 参加者が少なくおどろきました。県民の意識が低いのか、「交流」が浸透していて、「交流」という言葉はもう必要ないと思われるのかもしれない。隣に住む外国人の存在は認めているが、触れ合っていない、興味が無い人が多いような気がします。在住外国人と日本人との相互理解と共生がなければ、松江地域における国際交流の未来はないのではないのでしょうか。しかし、「相互理解」を「共生」の状態にする方法がわかりません。そのヒントが分かる講座になればいいなあと思います。
- F 期待しています。

IV アンケートの結果の評価

アンケート結果は、参加者の多くが明確な動機を持って公開講座に参加されていることを示している。回答者全員がなんらかの形で外国人と接する機会を持っており、職場や日本語教室など、非常に身近な環境における国際交流が盛んであることも分かる。また、国際交流が、アジアの一部の国々に集中しており、それ以外の国々との交流に対して島根大学の役割の期待なども示された。また、公開講座終了時には、今後、このような国際交流に関する講座にもっと積極的に取り組んで欲しいという趣旨の要望が、参加者全員から出された。

おわりに

旅行、留学、仕事などで海外に行く日本人や、海外から日本を訪れる外国人の増加に伴い、外国人と身近に接する機会が増えた昨今では、国際交流という言葉は陳腐な響きすら与えかねない。島根県が姉妹都市の関係を結んでいる都市だけでも、晋州市（韓国）、吉林市、杭州市、銀川市（以上、中国）、ニューオリンズ市（米国）があり、その外にも、ロシア連邦の沿海州、アイルランドなどの国や地域と友好交流に関する覚書を交わしている。本学の大学間交流協定締結校は10か国33校にのぼる。松江地域では、様々な国際交流イベントが開かれ、市民が異なる文化に接する機会が、以前と比較して飛躍的に増大している。これほど国際交流が一般化した現在、国際交流について考える必要はもうないのだろうか。著者らは、その逆に改めて「国際交流とは何か？」ということを変更して考える必要があると考える。我々一人一人が、国際交流について各自の固有の文化と照らし合せて改めて思考する時にこそ、様々な立場の意見を率直に述べ合い議論を深め合う知的な場が、ますます重要になって来ている。松江地域の国際交流に係る情報の提供をした上で、受講者一人一人の具体的な交流活動への更なる一歩へと繋がる機会を提供することが出来たという意味でも、本年度の公開講座は、一定の成果を挙げたと著者らは考えている。

しかし、問題点や課題がなかったわけではない。以下に、それらについて述べる。

公開講座の運営上では、初めての講座であったせいか残念ながらいくつかの問題が散見された。公開講座の担当者への採否の連絡と学外広報の理路の正常化、講座参加費の有無についてのコンセンサスを得ることなどが今後の課題であると感じた。大学が地域社会に負う責任の一つに知的財産の還元があり、本学も例外ではない。その観点から我々は、講座参加費用は無料を前提として企画立案した。費用については、講座内容によっては、実技や作品製作に必要な施設・用具等の使用、旅費等々に参加者の自己負担が必要になることもあるだろう。大学が市民にカルチャーセンター的なサービスを提供するという立場で運営している講座等では、座学の場合でも受講者を顧客ととらえて受講料を設定しているようであるが、一般的に大学が地域の方々との情報共有及び情報交換を含んだ知的貢献を目的として実施する座学の公開講座は無料開講であるようだ。本講座は、直接の講座担当者への諸連絡を経ずに生涯学習教育センターの決定により一旦有料で学外に広報され、その後講座実施直前に改めて無料化して広報された。結果的に地域の皆さま、また、共催者である松江市国際交流課に混乱と御迷惑をお掛けし、大変申し訳なく残念に思っている。この紙面を借りてお詫び申し上げたい。参加登録者数にも影響があったのではと思う。講座の運営方法は、島根大学の公開講座開催の基本理念に基づいて実施されることが望まれるため、今後は、公開講座のあり方について、学内でのコンセンサスを得ることが肝要であると考えられる。

次に、今後の課題として考えられる講座の内容について述べる。今年度の本講座は、留学生に代表されるような海外から松江地域へ来訪した外国人との国際交流に重点を置いた話題が多かった。「お客様にどのように接するか」というイメージが先行していた感があった。翻って、本学の日本人学生の留学について目を向けてみると、交流協定に基づく短期留学制度により、留学している学生は、平成17年4月現在、4カ国6大学に10人である。留学生の受け入れ数に比べ、本学から世界へ留学する学生はまだまだ少ないと言わざるを得ない。数は少ないものの、留学に限らず、旅行やボランティア活動などで、本学学生が海外で貴重な知見を得て帰国している例もあるようだ。本学教職員の中にも海外経験豊富な人材が多い。彼らは、在外で何を感じその経験をどのように捉え、どのように生かしているのだろうか。国際化社会における多様な文化との出会いを個人が各々いかに経験し評価したのかをケーススタディ的に学びつつ、そこから松江地域における国際交流の意味を考えるという視点も有意義なのではと考える。今後の課題とし、是非次回の公開講座に生かしたい。

謝辞

本企画に賛同して講座の講師を担当して下さった、北神慎司先生、藤岡大拙先生、内藤忠和先生、李順恵先生、兒玉涉治先生（以上、講座担当順）の諸先生方、また、本学の留学生の思いを代表して貴重な実体験を披露してくれた、総合理工学研究科のザイヌル・アクラミン氏と、本講座の実施に当たり惜しめない協力をしてくださった松江市国際交流課の職員の方々に深く感謝する。また、本企画を採択し、お世話をしてくださった、生涯学習教育研究センターの方々、社会国際連携課の担当者の方々、そして毎回教室に足を運んでくださり、本公開講座を共に創ってくださった受講者の方々に、深く感謝する。

注

- 1) 島根県環境生活部国際課『島根県の国際化の現状』2005年, pp.85-87。
- 2) 島根県総務部国際課『島根県在住外国人実態調査報告書』2001年。
- 3) 島根県環境生活部国際課『島根県の国際化の現状』2005年, p.4。
- 4) 鳥取大学大学院連合農学研究科の島根大学所属学生分も含んでいる。また、便宜的に平成14年以前は、旧島根大学と島根医科大学の留学生数を加えて表示してある。
- 5) 文部科学省高等教育局学生支援課『我が国の留学生制度の概要—受入れ及び派遣—』2004年, p.7。
- 6) 独立行政法人日本学生支援機構『留学生受け入れの概況（平成17年版）』2005年。
- 7) 松田みゆき「留学生特別コースの留学生への地域の日本語教育支援—松江市における実例—」島根大学生物資源科学部主催公開講演会, 2004年3月8日。
- 8) 中園博美「島根大学における留学生受け入れ体制の整備に向けて」、『島大言語文化』第16号, 2004年, pp.111-125。
- 9) 島根大学『島根大学の現状と課題（Ⅲ）開かれた大学教育の実現をめざして』1994年, p.213。
- 10) 松田みゆき「島根大学留学生の日本語教育の現状と課題—日本語ボランティアグループと島根大学の連携の必要性について—」、『島根大学生涯学習教育研究センター紀要』, 第1号, 2002年, pp.15-33。
- 11) 山崎佳子（東京大学大学院工学系研究科）, 松田みゆき（島根大学外国語教育センター）, 島根大学生物資源科学部主催公開講演会「島根大学留学生の日本語教育について考える—特別コース留学生を重点に—」, 2004年3月8日実施（於：生物資源科学部1号館2階203室）。

参考文献

- 1) 島根県留学生等交流推進協議会『国際交流しまね』2004年, No14。
- 2) 松下達彦「外国人のためのソーシャル・サポート・ネットワークにおける大学教職員・大学の位置付け—日本語学習支援などの具体的支援策—」、『国際学レビュー』桜美林大学, 1999年, 第11号, pp.25-47。
- 3) 文化庁編『地域日本語学習支援の充実—共に育む地域社会の構築へ向けて—』2004年。